夏秋ナス（ヒゴムラサキ）

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作　　型		◇ ○～△	〰〰 ▲	〰〰 ◆	♯ ◎ ――	――／／／	／／／	／／／	／／／	／／／	／／／	
主な作業		播種　鉢上げ	接ぎ木		定植　収穫							

―――― 技　術　体　系 ――――

1　作型の特徴

高冷地の夏期に冷涼な気候を活かして高品質ヒゴムラサキを生産する。

台風対策のためハウス栽培を基本とする。

2　適応地域

標高４００m以上の高冷地

3　栽培条件

(1)温度

生育適温は22～30℃。17℃以下で生育着果ともに鈍くなり、10℃以下でアントシアニンが発現、生育が止まり、-1～-2℃で枯死する。35～40℃で花器に障害が現れ、奇形果となる。

花粉の発芽、花粉管の伸長の適温は28℃前後で限界温度は最低15～17℃、最高33～40℃で種子発芽、生育とも変温がよく、日較差10～15℃が望ましい。

(2)光

光飽和点は約４万ルックスで、４～10月は充分な光量があるが、11～３月には日照不足となる。

また、生育の他に果実の発色にも光が必要で、日照不足の冬場から日差しの強い初夏までの栽培では、時期にあった摘葉・整枝が重要である。

(3)土壌条件

土質に対する適応性は割合広いが、深根性で長期間にわたる作型のため、耕土が深く、地力が高く物理性に優れた土壌が望ましい。

(4)水分条件

水分は土壌・空気中ともに豊富な方が良く、根が深く張る前の土壌の乾燥には特に弱い。しかし、停滞水による根痛みなどは、土壌病害や草勢低下につながるため、排水がよいことが必須である。灌水の目標はｐＦ2.0～2.3程度が良い。

(5)肥料条件

生育期間が長いため、比較的多量の肥料を必要とする。特に収穫開始以降の追肥は重要で、開花の盛んな時期になると窒素と加里の吸収が急激に増加する。生育後半では加里の吸収が増え窒素を上回るようになる。

4　施設装備

(1)連棟、単棟ハウス

(2)潅水施設

5　経営目標

(1)収量　　　　　　　　１０t/10a

(2)投下労働時間　　１４００時間/10a

(3)所得率　　　　　　４０％

(4)経営規模　　　　　２０ａ

（家族労働力２人の場合）

―――― 栽　培　技　術 ――――

1　品種と特徴

「ヒゴムラサキ」

在来の「熊本長ナス（赤ナス）」を品種改良した品種で、果実が大きく（果長二八センチメートル、果径八センチメートル、三五〇グラム）、軟らかい、アクが少なく甘いという特徴がある。

「台木」

夏秋栽培では、草勢が強くなりすぎないように、「台太郎」などの草勢がおとなしめの品種を用いる。

2　育苗

(1)播種

播種は２月上旬～２月中旬に行い、１０ａ当たり穂木、台木とも４０㎖用意する。

播種箱を用いる場合は１０ａ当たり穂木用、台木用ともそれぞれ６箱用意する。

播種の方法は、１箱に１０～１２条、１条当たり４０粒内外を播種し、５～６ｍｍの覆土を行う。

(2)仮植

穂木は本葉１～１．５枚の頃、株間１０㎝に移植する。床面積は本圃１０ａ当たり２０㎡が必要になる。台木は径１２㎝のポリポットに鉢上げする。

(3)接ぎ木

播種後３０～３５日で行う。

温度管理

	昼　間	夜　間
発芽温度	３０～３５℃	２０～２２℃
発芽後温度	３０℃	２５℃

(4)育苗管理

①水管理

潅水は水温に注意し、ハウス内の温度が上がる晴天日の午前１０時頃より行う。１回の潅水量は少なくし、夕方には床土の上面が乾く程度に与える。

②過湿対策

天候に応じた潅水を行う。

③光線管理

光線の透過を促すため、特に午前中は最大限に光が入るよう、被覆物の除去を行う。

（良質苗の条件）

○軟弱徒長せず、茎の大きさと節間が適度の株。

○葉幅が広くなく、葉肉厚く、葉に艶のある株。

○太根になる素質のよい根が均一に広がり、根色が白く、地上部茎葉とのバランスがよい株。

３　本圃準備

(1)栽植様式

畦幅２００ｃｍ、株間９０～１００ｃｍ、１条植え３本仕立てで、１０ａ当たり４８０～５３０株程度とする。

(2)施肥

堆肥は、２ｔ／１０ａを１月下旬までには入れておく。

施肥量　（ｋｇ／１０ａ）

	N	P_2O_5	K_2O	備　　考
基　肥	３０	３５	３０	完熟堆肥２ｔ
追　肥	３０	３０	２０	炭酸苦土石灰200kg
全　量	６０	６０	５０	硫酸ﾏｸﾞﾈｼｳﾑ20kg

(3)天井ビニルと防虫ネット被覆

定植の１ヵ月前までに被覆する。

(4)畦づくり

土壌水分が適当な時は、施肥、耕起後、畦をつくり畦表層を軽く押さえて白黒マルチを密着敷設する。定植時の地温を１５℃以上確保するためにマルチは早めに行う。

４　定植

植穴に土壌施薬をして定植する。

定植は晴天日に行う。植え付けは浅植えとし、定植後は潅水を行い活着を促進する。

５　定植後の管理

定植が終わったら、早めに仮支柱を立てる。その後、枝の発生に伴い誘引支柱を立てていく。

生育初期はわき芽は放任とし（１０～１５ｃｍ）、根を深く張らせる。その後、数回に分けて摘芽する。

６　誘引、仕立て

ハウス栽培ではU字型に誘引する。

仕立て方は３本仕立てとし、頂芽と第一花の下の側枝を２芽、第２花着果頃に発生する勢いの強い側枝を選定し仕立てていく。

U字誘引の様子

７　整枝

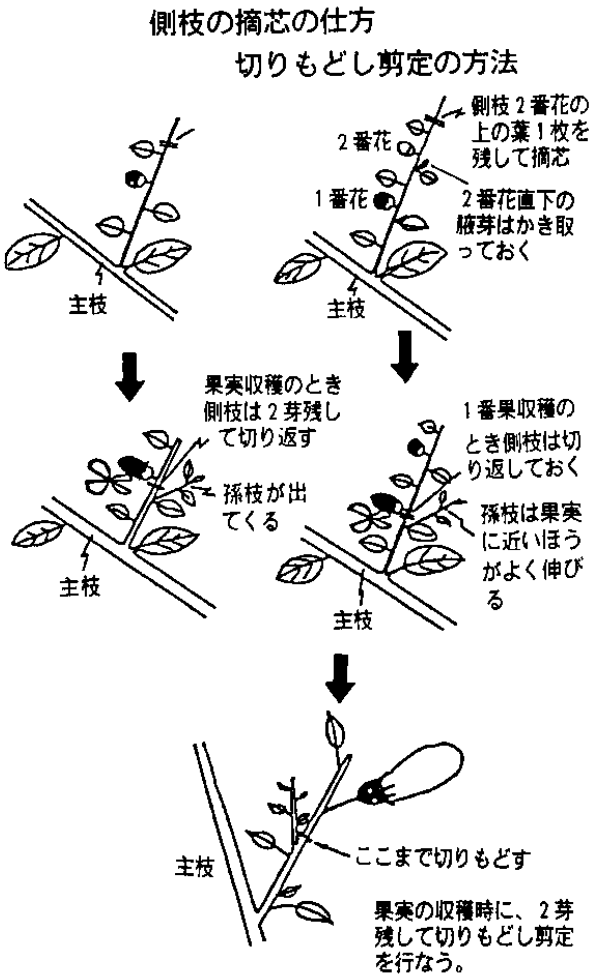
○花がある場合

花の上１葉を残して摘心する。側枝の第２，３葉のわき芽は除去して第１葉のわき芽を伸ばす。

側枝の葉が大きくなったら主枝の葉は除去する。

○花が無い場合

側枝の第１葉の上で切り戻し、第１葉のわき芽を伸ばす。側枝の葉が大きくなったら主枝の葉は除去する。



８　摘葉

摘葉は、下位部に光が当たるよう計画的に古葉を摘み取るが、生育が過繁茂になってきたら、果実に光が当たるよう適当に摘葉を行う。

草丈が、１５０～１６０ｃｍ程度になったら主枝を摘心し、以降は側枝利用を主体として採光をはかるため不要な茎葉は摘除する。

９　温度管理

午前中	午　後	夜　間
２７～３０℃	２５～２７℃	１６～２０℃

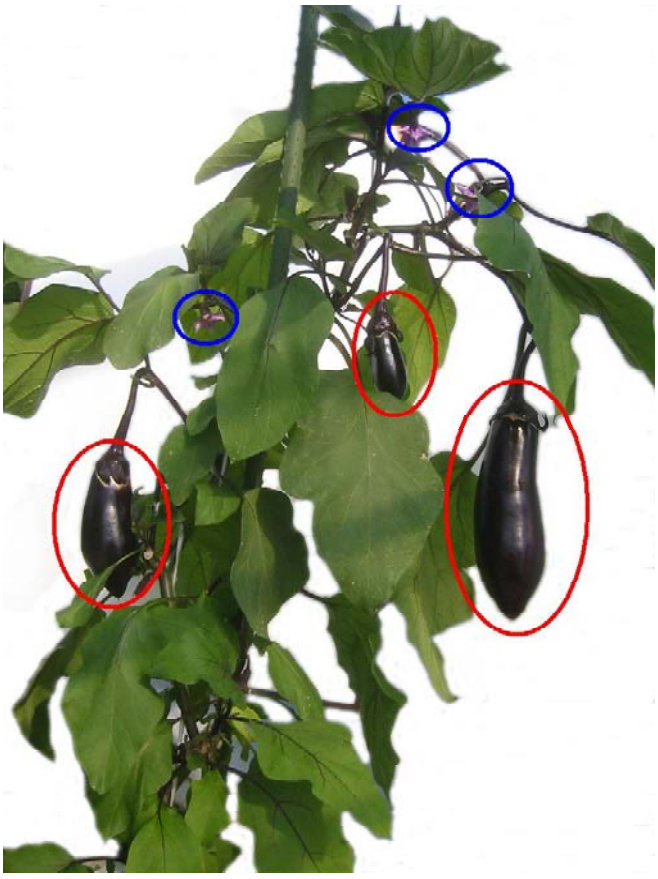
栽培前半（６月中旬まで）と栽培後半（９月下旬から）は夜温を１６℃確保できるようにサイドビニルを閉めて温度確保に努める。

夏期高温時は３０℃以上にならないように換気に努める。

１０　交配

トマトトーン（１００倍）を開花時に処理する（週２～３回）。重複処理しない。

適正な着果数は、１枝に大きさの異なる果実が３～４個と花をバランスよく着果させる。着果数が多くなりすぎると、果実肥大が悪く、つやなし果、ぶくナス果の発生につながる。



着果良好な状況

１１　収穫

成熟日数が長くなると成り疲れやつやなし果の発生につながるので適期収穫に努める。

収穫の目安（成熟日数）

６月	約２５日
７～８月	約２０日
９月	約２５日

選別基準

階級	１本の長さ	本数／箱
２Ｌ	２８ｃｍ以上	１５
Ｌ	２８ｃｍ未満	２０
Ｍ	２５ｃｍ未満	２５
Ｓ	２３ｃｍ未満	３０

舌出し果

１２　障害果対策

(1)舌出し果

雄ずいのもとの部分が分かれて生じるものであり、ガクの下部分から突起が出る。

低温、多肥、多灌水が組み合わさり生長点部分の栄養状態が濃厚になったときに発生する。

低温、多肥を避け草勢が強くなりすぎないようにする。

(2)つやなし果

果皮の光沢がなくなり、程度の軽い物は果頂部から部分的につやが無くなり、甚だしいものは果面全体に及ぶ。

つやナシ果は、土壌の乾燥や高温などによって、吸水量以上の果面蒸散量がある場合に発生する。

土壌の乾燥や日中の高温を避けるとともに適正な灌水管理に努める。また、土づくりや着果と草勢のバランス確保に努め、根の活力の維持を図ることも必要である。

(3)ぶくナス果

果実の表面が部分的に膨れ、凹凸を生じる。切断してみると隔壁部がすいており、ぶかぶかしている。

成り疲れ等で草勢が弱っている時に発生しやすい。

過剰な着果を避け、草勢と着果のバランスを保つようにする。また、適宜追肥を行い、草勢の維持に努める。